

バリウムにおさめられている標本をもとに日本固有種として *A. rariflorum* Samuelsson を発表している。そのラテン記載と図は前述したトウゴクヘラオモダカの形態とはほぼ一致している。また、京都大学理学部植物学教室には U. Faurie によって 1898 年に八戸市から採集され *A. rariflorum* Samuelsson の isotype と付記された標本があるが、花序全体の枝がまばらであることや第 1 節めの枝数が 2 本であること、また狭長楕円形で葉身の基部が葉柄に短く沿下しているなどの特長から当該標本が牧野富太郎の「タウゴクヘラオモダカ」に相当するものであることは疑う余地がない。

したがってすでに澤田武太郎氏が植物研究雑誌 11 : 522 (1935) で *A. plantago* L. との関係において指摘しているように、トウゴクヘラオモダカにはやはり

A. rariflorum Samuelsson をあてるべきであると考えられる。

分布について

Samuelsson (1932) は *A. rariflorum* の証拠標本として 8ヶ所の産地をあげたうえで日本の中央部ではまれではないとしているが、この表現だけでは分布の傾りが実感できない。そこでこれに国立科学博物館、東京都立大学理学部付属牧野標本館、東京大学総合研究資料館、東北大学理学部生物学教室、京都大学理学部植物学教室で筆者が直接確認した標本および Usuba Herbarium の標本産地を加えて図 4 のような分布図を作成した。これを見るとトウゴクヘラオモダカ *A. rariflorum* Samuelsson は関東地方を中心に一定の分布域を有していることがよくわかる。

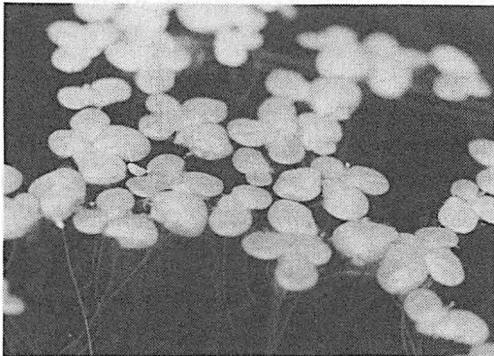
イボウキクサの新産地

大 滝 末 男

フジマリモの発見者として知られている山中湖村在住の杉浦忠睦氏に案内されて、私は 1986 年 7 月 7 日、山梨県南都留郡忍野村字忍草にある鶴ヶ池とよぶ忍野八海付近の人工池に立寄ったところ、開花中のイボウキクサ *Lemna gibba* L. が多産しているのを発見したので発表する。

この池はやや長方形で、水深 1~2 メートル、広さは約 15 アールほどあり、イボウキクサは岸沿いに幅 2~3 メートル、ところによっては 10 メートル以上の水面に純群落をつくっているほど多産していた。

ところで忍野八海は昭和 9 年 5 月 1 日、国の天然記念



開花中のイボウキクサ

物として指定された化石湖の中央部にあり、富士山に降水した雨水が噴出している地域である。極めて珍しい自然現象なので観光地となり、休祭日には特に観光客が多いが、イボウキクサは 8 個の湧水池のうち菖蒲池やお釜池などいくつかの水面でも純群落が数か所で見られた。

さて、イボウキクサはアメリカからの帰化水草であるが、最初の帰化地は名古屋市で、1974 年頃浜島繁隆によって報告された。それ以後、広島市 (1976) や堺市 (1978) などで帰化が確認されているだけである。したがって今回の私の発見は、日本における第 4 番目の生育地で、かつ北限であると考えられる。

なお、上記の人工池周辺ならびに忍野八海付近の水域には、次にあげるような湿生植物や水生植物および水生ゴケが見られたので、次に順不同に付記する。

ウキクサ科では、ヒメウキクサとアオウキクサ、その他ではオランダガラシ・バイカモ (花) ・フトイ・キショウブ・ショウブ・ミゾホウズキ (花) ・ミクリ sp. ・アゼスゲ (?) ・コカナダモ・エビモなどであった。また、水生のコケ類では、蘚類のアオハイゴケ *Rhynchostegium riparioides* (Hedw.) Card. と苔類のホソバミズゼニゴケ *Pellia endiviaefolia* (Dicks.) Dum. が、ある家の庭の小さな湧水池で見られた。

最後に、ご案内いただいた杉浦忠睦およびコケ類の同定で、ご教示下さった会員の渡辺良象 (東京) 両先生に厚く御礼申しあげる。

(昭和 61 年 7 月 27 日記)